

熊谷地区労働組合協議会  
地域社会研究会・社会思想史研究会

## 地域社会研究論集 8

**音楽共同体「ラ・フォル・ジュルネ」をめぐる一思考**  
—「ラ・フォル・ジュルネ」とベートーヴェンの音楽思想を主題とする試論—

山下祐樹

(YAMASHITA YUKI)

2021

熊谷地区労働組合協議会  
地域社会研究会・社会思想史研究会

音楽共同体「ラ・フォル・ジュルネ」をめぐる一思考  
—「ラ・フォル・ジュルネ」とベートーヴェンの音楽思想を主題とする試論—

Consideration related to the music community "LA FOLLE JOURNÉE"  
-Outline of the treatise on " LA FOLLE JOURNÉE " and Beethoven's musical thought-

山下祐樹

YAMASHITA YUKI

2021

目 次

第1節 「ラ・フォル・ジュルネ（熱狂の日）」	・・・	2
第2節 音楽共同体の意義—「ラ・フォル・ジュルネ」とベートーヴェン	・・・	3
コーダ 「共同体をめぐる試論」	・・・	5
引用・参考文献・資料	・・・	7

## 第1節「ラ・フォル・ジュルネ（熱狂の日）」

2005年、の東京の初夏、「ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン（熱狂の日）」と称せられる音楽祭が華々しく開催された。テーマは「ベートーヴェンと仲間たち」であった。この音楽祭は、市民レベルの「音楽共同体」の存在を我々に改めて実感させる重要な機会となった。先ずは、「ラ・フォル・ジュルネ」について過去の経緯や成果を交えながら解説する。

「ラ・フォル・ジュルネ（熱狂の日）」(LA FOLLE JOURNÉE)の発端となるナント音楽祭がスタートしたのは1995年である。1995年の第1回「ラ・フォル・ジュルネ」音楽祭はテーマ作曲家に「モーツァルト」を据え、2日間で37コンサートを実施。約20,000人の聴衆を集めている<sup>(1)</sup>。「ラ・フォル・ジュルネ」の顔ともいえる、アーティストック・ディレクターのルネ・マルタンは、経営管理学の高等教育をおさめると同時に音楽（パーカッション、音楽史、電子音響楽）を学び、ナント市に芸術研究制作センター（CREA）を創設した。1979年より同センターの芸術監督をつとめ、ナント市とロワール地方で毎年、室内楽と宗教音楽を中心としたプログラムを紹介している<sup>(2)</sup>。マルタン氏は「ラ・フォル・ジュルネ」音楽祭のスタートを「フランス音楽界に対する革命」と称した。第2回（1996年）のテーマ作曲家は「ベートーヴェン」である。

マルタン氏と旧知の音楽家や、音楽祭に共感した音楽家たちが徐々に集まり、1997年（第3回）は「シューベルト」、1998年（第4回）は「ブラームス」をテーマ作曲家として取り上げている。この時点で2日間、82コンサート（来場者数は約50,000人）となっていた音楽祭は、1999年（第5回）になると「フランス音楽（ベルリオーズ、フォーレ、ラヴェル）」というテーマで、新しいフェイズへと入っていく。ひとりの作曲家だけにスポットを当てるのではなく、より広い視点で音楽を見つめ直すというコンセプトにより、聴衆と一緒に考える音楽祭という側面を持ち始めたのだ。これはマルタン氏の豊富な知識と音楽に対する情熱が成せる技でもあった。彼は、有名な映画のタイトルにちなんで3人の作曲家のファースト・ネームを列記し「エクトール、ガブリエル、モーリスと仲間たち」という親しみやすいタイトルにし大成功をおさめた。

ヨーロッパの2都市を加え、テーマもいっそう多彩に21世紀を目前に控えた2000年（第6回）のテーマ作曲家は「バッハ」。この年は3日間で170公演に拡大され、さらにはポルトガルリスボンでも初開催されている。21世紀に入ると、音楽祭の冒険心はますます発揮されるようになった。2001年（第7回）はロシア音楽をテーマに3日間で191公演。2002年（第8回）には「ハイドンとモーツァルト」がテーマ作曲家に選ばれ、スペインのビルバオでも開催される。

3都市での並行開催となった音楽祭は、2003年（第9回）になるとさらに大きなステップを上ることとなった。「イタリアのバロック音楽」をテーマにしたこの年、ナントでは5日間で224ものコンサートが行なわれ、初めて入場者数が10万人を越えたのである。マルタン氏は「音楽祭がはっきりと定着し、我々もあらためて聴衆のニーズに対応することを考える年になった」と述懐している<sup>(3)</sup>。記念すべき10周年となった2004年はクラシック音楽の王道とも言えるロマン派の作曲家たち、つまりシューマン、ショパン、メンデルスゾーン、リストたちがテーマ作曲家となった。言うまでもなくピアノ作品が充実し、マルタン氏がそれまで培ってきた数多くのピアニストたちとの信頼関係を反映させた年となった。

2005年、11年目を迎えた音楽祭は、「ラ・フォル・ジュルネ（熱狂の日）」(LA FOLLE JOURNÉE au JAPON)という名称に携え、東京へとやって来る。テーマは「ベートーヴェンと仲間たち」であった。第2回のテーマ作曲家に再び登場を願い、さらに彼の周辺までをカバーした構成・選曲は、聴衆の知的好奇心を大いに刺激した。本家であるナントでの開催は5日間で265コンサート。東京では3日間で、約32万人が来場するという空前の大成功を収めた。そして2006年、テーマは「国々のハーモニー（ヨーロッパ各国のバロック音楽）」。しかし前年の大成功が認められた東京だけは、日本人の好みに合わせて「モーツァルトと仲間たち」という独自のテーマにより開催。生誕250周年を迎え、クラシック音楽ファンの枠を越えて盛り上がっていたモーツァルトへの関心を、さらにヒートアップさせる一大イベントになった。

日本人はクラシック音楽に対する関心が強いと言われており、また東京近郊には多くの交響楽団が存在していることも確かではあるが、あくまで一部の人々が楽しみ、その人たちの関心が強いということに限定されていた。しかし、そのような状況に対する試みが、「ラ・フォル・ジュルネ（熱狂の日）」である。多くの人々は気軽に足を運べる音楽共同体への参加が可能になったのである。また、クラシック音楽を体験するための門戸を開くことで、我々は読書や授業とは異なる異文化の素晴らしさを実感することになる。その異文化という概念から捉えたとしても、一部に通用している異文化ということではなく、世界的に高い評価を受け続けているクラシック音楽であるからこそ、我々は世界中を包含する音楽共同体の一員になることができるのである。加えて、同じ場所で演奏し、同じ場所で鑑賞するという「場所」の共同体を我々は実感し、同じ興味を持する人々との感動の共有することができるのである。その感覚は、祭りへの参加に似ているが、祭りによって人々が享受するものは主として祭囃子や踊りの「明」と「動」であるのに対して、音楽やジングシュピール、オペラによって人々は「明」と「暗」、「動」と「静」それぞれを感得することができるという画期的な一面も持しているのである。極論ながら、ベートーヴェンが「音楽こそは、あらゆる叡智や哲学よりも高い啓示だ」と述べたことを想起できる。そもそも、聴衆の前には楽団と同時に、作曲者が居据わっている。作品を通して我々は作曲者と会しているのである。

例えば、作曲者との対話は、モーツァルト交響曲第 41 番「ジュピター」の場合において、このような楽想と共に達成せられるのである。「曲に冠せられた「ジュピター」は通称にすぎないが、しかしこの形容はよく曲のイメージを捉えているといえるだろう。古代ギリシアの古典的彫刻を思わせる形態美は、晩年のモーツァルトが到達していた創造の高みを表明して余りあろう。ほとぼしり出る楽想が、全体を秩序づける形態のバランスと一体化され、聴き手に訴えかけようとする作曲者の内面の衝動が形の美と類い稀な調和をみせている。しかも曲は壮麗さのなかにも静けさをたたえ、軽やかなリズムに支配されて、動的であると同時に静的である。つまり曲は古典ギリシア彫刻にも対比されるべき、最も激しい動きがその極限においては静的な形態をとるといふ、偉大なる静けさをたたえているといえるのである。」<sup>(4)</sup>

かくよう、我々は楽章ごとに表現される明暗動静を、コンサートホールという「場所のコミュニティ」において実感し、我々の精神へと至らしめる美の響きを体感することになるのである。まさしくコンサートホールはモーツァルトとの対話を可能にする場であり、その対話の機会を多くの人々に長時間に渡って、同じ場所において提供してくれるのが「ラ・フォル・ジュルネ」である。

## 第 2 節 音楽共同体の意義—「ラ・フォル・ジュルネ」とベートーヴェン

東京における第一回目の「ラ・フォル・ジュルネ」のテーマがベートーヴェン (Ludwig van Beethoven) に設定されたことは、大きな意味を持つ。すなわち、その意味とはベートーヴェンという作曲家の音楽性や作品の特質に由来している。

ベートーヴェンの作品が、先駆者と異なっていた点は、特定の実用的音楽にも携ったとしても、さらに個人的な告白音楽への時代の変化を、一身のうちに表現していたことである。かれは、宮廷、音楽団体、教会の何れにも属することのなかった最初の音楽的巨匠であった。かれは、ひとりの独立者であり、自主的な個人であり、市民である音楽家であった。まさしく、ここに市民共同体のための音楽という特質がある<sup>(5)</sup>。

ここにそのベートーヴェンの市民への音楽という性格が生み出された経緯を示すことになる。ベートーヴェンが、テプリッツという北ボヘミアの保養地でゲーテと遭遇したのは、1812 年のことであった。ゲーテとベートーヴェン、精神の世界における市民性の代表者の二人は、しばらくこの同じ美しい観光地にすごすことになった。この年の夏、ここにはオーストリアの皇帝フランツ 1 世—1804 年にナポレオンの最後通牒により、ローマ・ドイツ皇帝の地位を放棄し、同時に「ドイツ国民の神聖ローマ帝国」はこうして終焉の時を迎えることになった—とその皇妃、王女たち、フランスの皇妃マリー・ルイーゼ・ナポレオン、ザクセン国王、ワイマル公爵などの皇帝、王侯およびすぐれた教養人たち、ゲーテや法律学者、とくに歴史法学のサヴィニーなどという選ばれた人々が集まっていた。

ベートーヴェンは、かれの最も深い理解者であり、保護者であったオーストリア・ハプスブルグ家のルートルフ大公にテプリッツから、ゲーテに度々会っていることを報せているし、ゲーテもベートーヴェンに会った印象として、この芸術家以上に熱情にみち、激動的であり、より真摯な人柄はない、と語ってい

る<sup>(6)</sup>。

しかしゲーテはベートーヴェンのこの世界に対する批判の姿勢を理解することはできなかった。ゲーテのほかに、新しい文学の流れを指導しているティードケ、ブレンターノ、レヴィーン、レッケ、エンセ、アマーリエ・ゼーバルトらの詩人たちと接触し、深く交わるようになったことは、ベートーヴェンの文学的教養を深めるために、少なからざる意味を持った<sup>(7)</sup>。

このときのゲーテとベートーヴェンとの遭遇そのものの意義については、様々な物語があるにしても、客観的に評価すべきことであろう。ゲーテが代表する「ワイマル精神」(Weimar Geist)と、ベートーヴェンとの接触は、市民社会の形成期において、共通の精神的基盤の上に立っていることが分かる。ワイマル精神を担う主な担い手は古典主義文学であった。ゲーテとシラーはその代表的作家であり、ドイツ市民階級の解放への「躊躇いがちな端緒」(メーリング)であったとしても、ともあれドイツ市民意識を要約していた<sup>(8)</sup>。1789年、フランス革命は勃発し、その怒濤のように迫る影響のもとに、このゲーテさえ、それは自分にとっても一つの革命であった、と告白し、シラーにいたっては、「群盗」「たくみと恋」などの革命的作品が、彼のうけた影響のすべてを語るものである。この二人、ゲーテとシラーは、フランス革命における人間の解放を理想としてかれらの実存の基底に確立していた。ゲーテの作品「ゴエツ・フォン・ベルリッヒュンゲン」「エグモント」についても同じことがいえる。「エグモント」は、ベートーヴェンが選りとった文学作品であり、「エグモント」への音楽は、ワイマル精神を表現していた<sup>(9)</sup>。シラーについては、ベートーヴェンが交響曲9番二短調「合唱」に使用した、「喜びに寄す」の人間への讃歌、「すべての人々は兄弟となるであろう」という言葉は、前に述べたモーツァルトのフライマウラーの理想を想起させるのであるが、これは無概念的なかけ声ではなく、市民共同体への呼びかけであり、世界市民主義の表明であった。「ワイマル精神」には、反プロイセン的な「ポツダム精神」、プロイセン国家権力の讃美と依存への態度を拒否する市民的意識が、深く貫徹していた<sup>(10)</sup>。

「ワイマル精神」は、政治的主張ではなく、市民的意識であるとしても、その窮極的に要求したものは、人間性の完成であり、美的精神の支配する世界であった。人類を奴隷的状态から文化の高みへ引きあげるのには、政治的手段による政治的変革ではなかった<sup>(11)</sup>。ゲーテとエッケルマンとの対話のなかで、ゲーテはシラーを評して、「シラーは幸運にも民衆の友人とみなされていたが、これはここだけの話なのだが、かれはわたしよりはるかに貴族的だった」と述べている<sup>(12)</sup>。

シラーはフランス革命の将来に対していささかも希望を抱かなかった。かれは、平和と自由の安住する国はどこに求むべきかと問いながら、地上に自由が住む常緑の国、青春の花咲く国を求めようとするのは空しいことだ、と詠嘆しているのである<sup>(13)</sup>。人間性の完成と美的教養を追い求めること、これがワイマル流の福音の本質であった。ドイツ市民階級の政治的活動は、いわゆる南ドイツ自由主義として19世紀ドイツ国民運動のなかに育まれていった<sup>(14)</sup>。しかし、その特質は、国民運動のなかにありながら、しかも非政治的であり、思想的であった。南ドイツ自由主義が自由の名において要求したものは、第一に精神上的の自由、宗教、良心、教授、出版などの諸自由であった。この思想的性格は、個人の道徳的自由を確信するドイツ観念論哲学の至上命題によって支えられていた。これこそは、「ワイマル精神」に通ずる共通の性格にほかならなかった<sup>(15)</sup>。

ベートーヴェンの作品のなかでは、第9番「合唱交響曲」(作品125)は、かれの生涯における傑作のひとつに数えられる。その技術と精神とが最高頂に達したときに創作された不朽の名作であった。これを一貫する精神は、まさに時代の精神を表現するものであった。この曲がベートーヴェンの他の交響曲と異なっている点は、純粋器楽曲ではなく、終楽章は独唱および合唱曲を伴っているという独自の形式をとったという点である<sup>(16)</sup>。その歌詞は、フリードリヒ・シラーの「喜びに寄す」が用いられた。「合唱交響曲」の完成には十数年を要している。その理由はスケッチから作曲中の時期における政治情勢にある。それはヨーロッパ全体の再編成を企図とした1814年のウィーン会議とその後の政変である。ウィーン会議の結論は、ヨーロッパの大国を強化し、ドイツは従来の「神聖ローマ帝国」を解消して、「ドイツ連邦」に組織化され、35領域の「諸侯」と4つの「自由都市」から成る「連邦会議」(Bundestag in Frankfurt am Main)が構成された。その目的は、ドイツの対外的・内部的な安全、個々の諸領邦の独立と不可侵性の確保にあった。全ての領邦国家の内部には、それぞれの社会的身分から成る領邦議会において憲法が制定されることに決定され、市民革命の要求はその形式で個々に処理され、制約をうけることになったのである<sup>(17)</sup>。

ベートーヴェンの周囲にも、このようなウィーン会議以後の反動政治が、メッテルニヒの指揮下に重圧を加え始めた。ベートーヴェンの晩年に側近のひとりとして、最も親しく交った人物で彼の伝記作家であ

るシントラーは、この頃のベートーヴェンが発した政治情勢並びに権威に対して批判的であった言動を伏せようと努力している。ベートーヴェンは、この憂鬱な時代において創作活動が活発ではない時期が続いたのである<sup>(18)</sup>。

1822年に至って、ベートーヴェンは大作「ミサ・ソレムニス」を完成し、1823年に長年作曲を準備し、次第に推し進めてきた「交響曲9番（合唱）」を完成することになった。「合唱交響曲」は、ついに1824年5月7日、「大音楽アカデミー」として、ケルントナー城門の傍の「宮廷劇場」で演奏されることになった。演奏の結果、その大作は、聴衆に深い印象を与え、拍手も感動に溢れた激しいものであった。最後には嵐のような拍手喝采が捲き起こったのであるが、ベートーヴェンには聴こえないので、独唱者のウンゲル女史が腕をとって彼を聴衆の方へ向けた、という話はよく知られている。喝采は四度も嵐のようにまきおこり、最後には「ヴィヴァット」（万歳）が起こった。平土間の人々が五度も拍手をしたので、警察官が静粛にと叫んで制止した、という報告もあった。このときの拍手は、皇帝に対するよりも、2倍も長く、2倍も大きかった、と比較されるように盛大であったと、いわれている<sup>(19)</sup>。

「合唱交響曲」の終楽章は、シラーの「喜びに寄す」を歌詞として使用した。この詩のなかに歌い上げられた思想は、まさにワイマル精神にほかならなかった。すでにメッテルニヒ体制の反動性のもとに支配されていたヴィーンの雰囲気の中では、ベートーヴェンさえ、「共和主義者」「ジャコバン主義者」であり、その作品に対しては、当局者は警戒を怠らなかった。そのような状況下で、「合唱交響曲」は十分に批判的精神でありえたのである<sup>(20)</sup>。「よろこびよ 美しい神の火花よ 楽園に生まれた少女よ われわれは情熱的に酔い お前の天にある聖堂に進む お前のふしぎな力は世の慣習が断ち切ったものを結び合わせる その柔和な翼の下で すべての人びとが兄弟となる さいわいにも友のなかでまことの友を得たものいとしい妻を得たものはすべてよろこびの声を合わせよ そう世にひとつでも人の心を自分のものとしたものはともに歌え それをこぼむものは泣きながらこの結束から去れ すべてのものは大自然の乳房からよろこびを飲む すべての善すべての悪が自然のばら色の足跡を追う 自然はわれわれにくちづけとぶどう 死の試練を経た友をあたえた 快樂はいやしい人間にあたえられ光の天使ケルビムは神の御前に立つ 天の妙なる計画に従って 多くの太陽が運行しているように 兄弟たちよお前たちの道を進め よろこびをもって英雄が勝利の道を歩むように 抱き合おう もろびとよ このくちづけを全世界に 兄弟たちよ 星空のかなたに 愛する父は住みたもう お前たちはひざまずくのかもろびとよ 創造主を予感するのか 世界よ 星空のかなたに神を求めよ 星のかなたに必ず主は住みたもう」<sup>(21)</sup>

ここに強調されている「すべての人々が兄弟」という願望は、もし現実の立場から解釈するとすれば、極めて抽象的な内容しか感ぜられないであろう<sup>(22)</sup>。しかし、これを取巻く厳しい環境の中では、力強い自由と世界市民主義への讃歌にほかならなかった。それはひろやかな心から歌い出された理想を基礎とし、完成された人間性と、高い教養と美の世界を求める歌であった。そして、これが空疎な理想主義ではなく、むしろ全世界—全市民的世界に受容されることを目指した訴えであった。その側面から、市民的共同体に対する呼びかけや、ここに「兄弟」と呼ばれているのは、市民革命が標榜したあの自由と平等と兄弟愛や博愛の表現であったといえる<sup>(23)</sup>。ベートーヴェンの作品は、特に交響曲第9番は、市民共同体の共感を求める願望の表れであったと理解できる。

すなわち、ここに、ベートーヴェンが設えた「音楽共同体」と称せられる世界、空間が存在しているのである。そして東京における第一回目の「ラ・フォル・ジュルネ」のテーマがベートーヴェンであった有意義性を我々は窺い知ることができる。「ラ・フォル・ジュルネ」はベートーヴェンを選択した第一の理由として、人気のある作曲家であるということを示した。しかし、交響曲第9番に謳われた兄弟愛や博愛の精神を我々は感受すべく、ベートーヴェンを先駆けに東京での「ラ・フォル・ジュルネ」は開始されたと、我々は認識することも可能である。

## コーダ「共同体をめぐる試論」

共同体とは何か、市民社会とは何かという問いを今の時点で投げ掛けられたとしても、筆者は的確な解答を述べることはできない。しかしながら、或る種の価値判断を述べることは可能である。すなわち、市民社会批判の一つに見られたように、かつての共同体を、今日的な特質を含ませた上で、復活、再構築さ

せる必要があると筆者は考えている。対して、市民社会を国家に止揚することによって市民社会の問題点を克服するという構想も誤謬ではなく、実際的にも有効な方法であろう<sup>(1)</sup>。

ただし、共同体の成員同士が友愛の精神を持ち、相互扶助することへの働きかけも重要である。この二項は、根本的には対立するものではないが、国家主義、共同体主義という名目に見られるように、理論上、極論として認識される状況がある。ところが、国家も必要不可欠であり、共同体も看過できないことは、自明の通りである。しかし、これらの議論も、国家とは何か、克服すべき問題を抱えた市民社会とは何か、そして共同体とは何かという議論に辿り付く以上、ニュアンスのみの思考に留まっていることを付言しなければならない<sup>(2)</sup>。

けれども、かつての原始的な共同体や農村共同体にて行われていた人々の相互依存の営みが、今日に生かされる多くの要点を持っていることは間違いない。ただし、かつての共同の労働という方法ではなく、各人のライフスタイルに合わせて、一定期において、共同体を形成するということは、困難ではない<sup>(3)</sup>。例えば、健全な山野から、美しい海が保たれて、格別に美味しい海産物が取れるというモットーの下に、林業や農業従事者と漁業従事者が新しいコミュニティ（共同体）を形成し、植林や砂浜清掃といった活動を共に行うということも、新たな共同体像の典型であろう<sup>(4)</sup>。

結局のところ、人間は一人では生きていけないという考えが、共同体の再構築というテーマの中には含まれている。逆に、人間は一人で生きていこうとしても、誰かを助けてしまう。このことは既に前人の時代からも見られる現象である。人間が他者と一緒に生きざるを得ないのは、何らかの束縛や、道徳心や倫理観から指示された結果ではなく、共同性への意志が我々の本能に宿っているからである<sup>(5)</sup>。しかしながら、今日の人間像は、その本能が目覚めず、個人主義的の様相を呈している。本能を呼び戻すためのレッスンは我々には必要であろう。先ず、その先駆けとなるのが、共感（sympathy）であるように筆者は考えている。

それは、まさにブラームスの交響曲第1番を聞いた際の、会場の一体感として表象されるものである。そして、その共感の領域を拡大させることによって、人間相互の共同体を形成する手がかりが得られるのではなかろうか。加えて、その共感とは歓喜や愉悦の共有に留まらず、死者を葬る時の悲嘆や落胆として表出することもあるだろう。これらの共感の先に多様な形態や概念を持つ共同体が存在している。最後に、アルフォンス・リングス『何も共有していない者たちの共同体』（野谷訳、洛北出版）という、逆説的な共同体論の冒頭を引用して、コードを記したい。

共同体とは普通、何かを、たとえば言語やものの見方や考え方を、共有している人びとが形づくっているものだと考えられている。また、一つの民族、都市、制度といったものを共に作っている集団によって形づくられると思われている。けれども私は、すべてを残して去っていく者、すなわち、死にゆく人びとのことを考え始めた。死は一人ひとりの人間に一つひとつ別のかたちで訪れる、人は孤独のなかで死んでいく、とハイデガーは言った。しかし、私は病院で、生きていた人が死にゆく人の傍に付き添うことの必然性について、何時間も考えさせられた。この必然性は、医師や看護師、つまり、できることをすべて行なうためにそこに居る人びとだけのものではない。死にゆく人に最後まで付き添おうとする人、打つ手が何もなくなったのに居つづける人、自分がそこに居つづけないわけにはいかないと切実に感じている人にとっての必然性でもある。それは、この世で最も辛いことではあるが、人はそうすべきだとわかっている。死にゆく人が人生を一緒に生きてきた親や恋人だから、という理由だけではない。人は、隣のベッドで、あるいは隣の病室で、まったく知らない人が孤独に死につつあるときにも、そこに居つづけようとするのだ。

これはたんに、一人ひとりの人間のモラルを問う決定的瞬間という意味しかないのだろうか？ 私は、病院であれ貧民街であれ、孤独に死にゆく人を見捨てるような社会は、みずからその土台を根こそぎにしているのだと考えるようになった。

私たちと何も共有するものがない一人種的つながりも、言語も、宗教も、経済的な利害関係もない一人びとの死が、私たちと関係している。この確信が、今日、多くの人びとのなかに、ますます明らかなかたちで広がりつつあるのではないだろうか？ 私たちはおぼろげながら感じているのだ。私たちの世代は、つきつめれば、カンボジアやソマリアの人びと、そして私たち自身の都市の路上で生活する、社会から追放された人びとを見捨てることによって、今まさに審判を受けているのだ、と<sup>(6)</sup>。

## 引用・参考文献・資料

### 第1節 音楽共同体—ラ・フォル・ジュルネをめぐる—思考

- (1) 「70万人のモーツァルト音楽祭全記録」ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン、東京国際フォーラム、5頁。
- (2) 同上。
- (3) 同、3頁。
- (4) 中河原理『名曲鑑賞辞典』、モーツァルト交響曲第41番 ハ長調「ジュピター」解説、317頁。

### 第2節 音楽共同体の意義—「ラ・フォル・ジュルネ」とベートーヴェン

- (5) 松田智雄『音楽と市民革命』、岩波書店、1985年、239頁。
- (6) 同上。
- (7) 同、239-240頁。
- (8) 同、240頁。
- (9) 同上。
- (10) 同、240-241頁。
- (11) 同、241頁。
- (12) 同上。
- (13) 同上。
- (14) 同上。
- (15) 同上。
- (16) 同、247-248頁。
- (17) 同、248-249頁。
- (18) 同、249頁。
- (19) 同、250頁。
- (20) 同、250-251頁。
- (21) 朝比奈隆他編『交響曲全集』芸術現代社、1984年、「ベートーヴェン 交響曲第9番」、138-139頁。シラー「歓喜に寄す」
- (22) 上掲、『音楽と市民革命』、251頁。
- (23) 同上。

### ユーダ「共同体をめぐる試論」

- (1) デランティ『コミュニティ・グローバル化と社会理論の変容』、(山之内・伊藤訳)、NTT出版、2006年、(Gerard Delanty 'Community' Routledge, a member of the Taylor & Francis Group. 2003)、山之内靖「グローバル化と社会理論の変容」、299頁。
- (2) 同上。
- (3) 同、300頁。
- (4) 同上。
- (5) 同、301頁。
- (6) Alphonso Lingis, *The Community of Those Who Have Nothing in Common*, (『何も共有していない者たちの共同体』、11-12頁。)

## 例言

- ・本稿は2007年3月に明治大学大学院政治経済学研究科博士前期課程に提出した論文「市民社会の思想史」の構成論文を再構成したものである。
- ・本稿を含む論文の全体の査読については、明治大学大学院政治経済学研究科の生方卓助教授（主査）、中川雄一郎教授、金子光男教授（各当時）が担当した。
- ・主題となる「ラ・フォル・ジュルネ」については論文発表の前年までの状況を示したものであり、それ以降においても大きな進展を経ているが、その内容については加味されていない部分がある。
- ・ユーダについては前掲の「市民社会の思想史」の結語部を追記修正したものである。
- ・今回の再構成にあたり、旧来の当論文を再認識した上で、考察の断片ともいえる小さき拙論の再版を助言していただいた地域社会研究会・社会思想史研究会の各位に感謝申し上げたい。



著者：山下祐樹（熊谷地区労働組合協議会 地域社会研究会・社会思想史研究会）  
 （熊谷市立江南文化財センター）



ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン「熱狂の日」音楽祭 2005  
 「ベートーヴェンと仲間たち」

地域社会研究論集 8

音楽共同体「ラ・フォル・ジュルネ」をめぐる一思考  
 —「ラ・フォル・ジュルネ」とベートーヴェンの音楽思想を主題とする試論—  
 Consideration related to the music community "LA FOLLE JOURNÉE"  
 -Outline of the treatise on " LA FOLLE JOURNÉE " and Beethoven's musical thought-

発行日 2021年4月5日

著者：山下祐樹 (YAMASHITA YUKI)  
 発行・編集：熊谷地区労働組合協議会 地域社会研究会・社会思想史研究会  
 発行所・事務局：熊谷地区労働組合協議会  
 （埼玉県熊谷市石原 1410-1）